

第3回「国家を建設するということ―あるべきとありうるのあいだで―」BP

＜導入：「夢を実現する」社会を築くために―参加と責任、客分と国民＞

ウェスタン・インパクトを前に、新政府を樹立して統一された国家を創って独立を確保した日本。その際、ひとびとが夢を実現できる社会を高らかに掲げて出発したものの、その先にある「参加」と「責任」の体系は頓挫し、棚上げされたままでした。確たる制度がなければ、「夢を実現する社会」は夢のままです。そこでは欧州各国をモデルとしつつ、「日本方民主主義」を実現するための議論が繰り広げられていました。

以下に挙げるふたつの議論は、その制度の根幹となる憲法、とりわけ議会と内閣の関係について論じたものです。前者の啓蒙家はイギリス流、後者の政府要人はドイツ流の導入を主張していました。

＜今日の材料：国家のグランドデザイン―イギリスモデルとドイツモデル＞

「イギリスには保守と革新という二つの政党の流れがある。保守は頑迷ではなく、革新は粗暴ではなく、人々の考え方の異なる結果として分かれたに過ぎない。この人々のなかから人物を選挙で選び、彼らが国政を議論する。これを国会という。

ゆえに国会は政党の代表者の会する場所である。当然、彼らの意見は異なるため、決定は多数決を持って行われる。内閣の大臣がいずれかの党派に属することはもちろん、総理大臣はかならずいずれかの政党の首領であり、国会の多数の人とともに国政を議決してこれを施行する」（福沢諭吉『民情一新』1879（明治12）年8月）

「ヨーロッパ各国、特にドイツなどは、決してイギリスのように立法権だけでなく行政の実権までも与えるところまでは至っていない。大隈や福沢のようにイギリス流を主張するものは、一挙に日本をヨーロッパ各国の上に凌駕させようとするものである。一時の軽はずみな行動によって将来を誤り、回復することができないようなことを恐れる。」
（岩倉具視宛て井上毅書簡、1881（明治14）年6月14日）

【参考：交詢社憲法案（福沢系）と大日本帝国憲法（明治憲法）の比較】

交詢社案：天皇は内閣と大臣を置いて全ての政務を彼らに任せる。首相は人々の希望に添って天皇が親任し、その他の大臣は首相の推薦によって任命する。

明治憲法：国务大臣は天皇を助け、その責任を引き受ける（55条）。天皇は行政各部の制度と文武官の俸給を定め、任命する（10条）。

＜今日のお題：次のことを考えてクラスに来てください。＞

- ・「参加」と「責任」について、それぞれの論者はどう捉えていたのでしょうか。
- ・理想的な前者と現実的な後者、どちらを支持しますか。それはなぜですか。